伴悦著『岩野泡鳴論』

榎本隆司

その「あとがき」に、「要は在来いわれてきたいわゆる〈特異なる作家〉岩野泡鳴の核質に迫るべく自身のうたがどの程度うたえたかにかかっている。」と、著者はかえりみている。そう語る著者の泡鳴研究への契機、もしくは立論の場は、おそらく、「少くとも詩人泡鳴てふ一個性の存在は、明治文明の一意義を語りて永遠の味ひあり。」という啄木の評価あたりに根ざしているに違いない。他の自然主義作家との「人生に対する態度」の相違を「如何に説明すればよい」かと啄木がみずからに課した、その課題を受けて、著者が、「この疑問はあきらかに、自ずと他の自然主義作家と同日に断ずることのいかに虚妄であるかを、暗示させえたものと受容できよう。」と論断しているところに、それははっきり立証されていると言える（「第四部　研究資料『岩野泡鳴研究史ノート(1)』」）。その論断そのものが、あるいは問題を残すことになっているのではないかとも思われるが、ともかく泡鳴に対する著者の評価の原点は、そのあたりに認められると見て間違いなさそうだ。そして著者は、泡鳴の「特異なる作家」たるゆえんを語るに、やはり「あとがき」に明記しているごとく、「新自然主義の縦糸を、自身なりに解きほぐすことからはじめる」のだが、この『新自然主義』以降の代表的評論群を体系化してとらえようとしたところに、本書のまず見るべき特色があり新味がある。

大久保典夫氏の伝記的基礎調査などを踏まえながら追尋される「第一部　岩野泡鳴」で、「家」との関係や思想形成の一過程、さらにキリスト教や中江兆民、王陽明、エマソンらとの出合いをめぐる意味が明らかにされるが、つづく「第二部　評論」が、本書のほぼ三分の一を占めている事実は、右に述べた本書の特色を如実に物語っている。Ⅰ新自然主義の位置　Ⅱ社会的・政治的人生観（(1)『近代思想と実生活』について　(2)『近代生活の解剖』について）　Ⅲ個人の存立と国家の独立　Ⅳ岩野泡鳴と大杉栄　Ⅴ「五部作」への距離――〈破壊的主観〉をめぐって――　から構成されているが、この見出しを一瞥するだけで、おおむねその論考の姿勢はうかがえる。

著者はまず、『神秘的半獣主義』（明39）以前の「詩生活」を「詩の形式」（明37）や「三博士の詩論」（同）などを通じてとらえ、「想を第一」とする主張や詩を相当に評価できる評論家の登場をうながす発言の中から、『神秘的半獣主義』への道を見通している。この「想を第一」に考えるべきだという主張や哲学的思考の要請は、すでに明治二十年代末から三十年代初頭にかけての、抱月や天渓らの新体詩問題への発言の中にあったことで、あるいはそうした時間の流れに沿った比較論によって、よりきわやかに泡鳴の存在を彫り上げることができただろうと思うが、それはともかく、つづいて著者は、詩における象徴詩運動をフランス象徴派をバックにとらえ、散文界へのその運動の先導者だった泡

鳴を解明する。花袋や藤村とは別に、有明らのフランスサンボリスムとも異なる泡鳴の、「神秘（空霊）と半獣主義（自然）の架橋に合致する」独自の表象刹那主義を発見するわけだが、このように見ていくことで著者は、在来、後続の評論を、『神秘的半獣主義』のバリエーションとしか見てこなかった諸説に対し、それが、「神秘的傾向から自然主義的傾向への転移的位置の所産である」ことを明らかにするのである。

「自然主義的表象詩論」（明40）においてメーテルリンクの死の表象主義をはなれ、ヴェルレーヌやマラルメのなかに自然主義的表象主義を見ることになった泡鳴は、『古事記』におけるような、「神話の一刹那に活現する生命の呼吸」のなかに人生観上の自然主義を探っていく。やがて抱月や天弦らによる自然主義理論の構築に対応して泡鳴は、「徹頭徹尾自己発展の態度」に立つ戦闘的新自然主義を展開する。両者の歩みをひとわたり概観したところで著者は、抱月などのスタティックな味到の地点を超えた泡鳴独自の主体的実行文芸論を、「同時代の新しい動向に吸着し」たものとして位置づけ、それが「表象の暗示」（新自然主義の続論）などを介在させて「耽溺」への実践化に連なることを説き明かしている。さらにそれは、罐詰事業の失敗を間に置いて『悲痛の哲理』（明43）に及び、いわゆる五部作への道を開き『古神道大義』（大4）へと連結していくのだが、その間を埋めるものとして『近代思想と実生活』（大2）及び『近代生活の解剖』（大4。執筆は大3）について論究し、そこに抽出される個人主義的国家主義が、自己を危機に追い込む時代閉塞の現実に対して「あるべき自己投影のあかしとして存在し、やむにやまれぬ叫喚としてあった」ことを認める。つまり著者は、その最晩年の日本主義を含めて、つねに「個人」と「国家」の問題を脳裏に置いて文学を考えてきた泡鳴を、四迷、透谷、啄木、漱石、鷗外らに通ずる存在として位置づけ、それゆえに、藤村や花袋、抱月や天弦らに比して特異な個性であったことを立証するわけだが、この間、中江兆民の『三酔人経倫問答』や大村純安の『竹窓遺稿』などとの関連を追尋する筆は、著者の研究の年輪をうかがわせる。

泡鳴像を刻む著者の方法意識は、『神秘的半獣主義』から『日本主義』に至る「膨大な論述」が、体系を欠き、論理的な飛躍や独断などのゆえをもって固定的な不評を買ってきた事実に目を向け、そのような固定的評価の前には泡鳴の本体は裸形を顕わしはしない、という理解を前提としている。したがって著者は、一般的に自然主義が、現実暴露の悲哀をかこちつつ観照主義にたてこもっていかざるを得なかった状況の中で、ひとり泡鳴が、芸術即実行の論である「新自然主義」を、なりふりかまわず自己主張せずにはおれなかった、その客観的条件を明確にしていくことの重要性を確認するわけである。本書三分の一のスペースが、それをあとづける評論研究に当てられているゆえんだが、著者は、そうした認識の正当性を、たしかに証し得ていると言っていい。「近代思想」や大杉栄とのかかわりをめぐる論究も、その一資として認めることができる。『「五部作」への距離――〈破壊的主観〉をめぐって――』が、泡鳴の「生きかた」の問題として捕捉されるのもゆえなしとしない。実生活者と芸術家としてのそれぞれの行

動が、「不可分に統一されてゆく泡鳴」であったとの理解に立つ以上、そしてその「特異な〈生きかた〉」を「近代日本文学にかつてなき無類の一大事件を投与する」ものとしてとらえる立場から、そこにはたしかにひとつの泡鳴論が成り立っている。その意味から本書に集約された著者の泡鳴研究は、十分評価されるに値する。ただ著者が、そうした方法意識に、いささかとらわれ過ぎ、「自身のうた」をうたうにこだわり過ぎた感がないではない。

とらわれることが方法的に有効である場合がある。とくに、対象となる作家のいかんによって、そういうことが言える。総じていえば、本書の場合むしろこれに当たると言っていい。だからこそ著者の泡鳴研究はそれとして十分評価されるわけだが、いっぽうでまた、こだわることによって、作家としての総体を彫り上げることをむずかしくしていくことがあるのも否定しがたい。そして本書はまた、一面においてそのむずかしさを克服し切っていないのである。

眼配りの利いた、しかも行き届いた資料の裏づけも得て、トータルにおいて本書は、泡鳴の総体を彫り上げるに足る眼を見せている。「第三部　作品」へと読み進むことでそれはよりはっきりしてくる。いわゆる「労働物」の解明などが、その意味でおもしろかったが、そうした説得力のあるおもしろさが、より全般にわたって求め得られたなら、と惜しまれる。たとえば著者はこう言う。

神秘的半獣主義や新自然主義をあらわし、さらには発禁などを契機としてせっかく書かれた『近代思想と実生活』や『近代生活の解剖』、という大著の反映が、ほとんど小説にみられない……

そして著者は、「その問題についてこれ以上たちいるわけにいかない」と述べているのだが、じつは、そこにこそより積極的に立ち入って欲しかった、と率直に思うのである。逆の立場から言えば、その「奇妙さ」をこそ力を入れて論じてもらいたかったのだ。なぜなら、泡鳴が著者の見るごとくかなり「特異な」存在であることはたしかなのだが、また著者が言うごとくであるがゆえに、その「特異」さにもかかわらず、泡鳴はやはり自然主義の中に概括される作家であったはずだからである。いわば著者は、自然主義一般と比して特異な泡鳴をとらえることにより、逆に自然主義の中に位置づける眼を曇らせてしまったようだ。著者の理解するところでは、泡鳴の破壊的主観は、「観照派」的自然主義や現代文芸界、あるいは伝統的日本の「家」に対置されて、それなりの反措定たり得ているということになる。それが五部作というかれ最大の小説の中に十分生かされていない欠陥は欠陥として、「そだてあげた思想と現実世界との対置のなかで、現実世界の幻影の産物として五部作があったことだけは少くとも認識しておいていいだろう。」というのが著者の立場である。「現実世界の幻影の産物」とか、「泡鳴独自の無類の実践の根拠」が「幻影という領域」にあったというとらえかたなど、必ずしも明確に把握しがたいが、ともかくそのような独自性が、作品形象の上での「欠陥」と裏腹の関係にあった点を、より客観的に論証して欲しかったのである。

望蜀のことかとも思う。独自性を明らかにすべく、著者の方法がそれなりの有効性を持っている点については先に述べた通りだが、よりトータルな作家像としてくくる視点を確保することによって、著者の研究はさらに大をなすのであろうと思うわけである。著者自身がすでに、「偏執」とか「倭小化」ということばを使って懸念していることであり、しかもはじめに紹介したごとく、あえて求めた方法であったことを踏まえれば、たしかに無いものねだりになるのかもしれない。しかし、全体を通じて、あるいは著者の理解がやや概念的であること、たとえば、悲痛とか死とかについての認識が、もうひとつたしかなイメージをもたらし得ていない事実などとかかわって、やはりそれは望まれることではないかと考えられるのである。さらに言えば、例示することは避けたいが、文辞の整わぬ表現がまま見られるという事実とも無縁ではなかろうという意味からも黙過しがたいのである。いえば、もっとことばをだいじにし、概念規定を明確にしていきたいということである。

著者と泡鳴とのふれあいは、すでに二十年余になるという。そういえば、泡鳴研究に真摯な意欲を見せる学究としての印象が、はるかに遠いものとしてある。誠実でひたむきな著者の姿は、ときに著者自身が追う泡鳴像と重なって見えさえした。そしていま著者は、泡鳴研究家として抜くことのできない位置に立っている。二十年という歳月の重みをそこに見て、生きた充実感が心に残る。「あとがき」に著者がもらされた感慨も、さこそと思われる。本書の成ったことを心からよろこぶとともに、この間の著者の努力に対し、あらためて深い敬意を表するわけである。

著者には、みずからをきびしく律する姿勢がある。文学を心するものとして当然でありながら、必ずしもそうでない存在に無感覚になりつつある現状だけに、わたしは著者の姿勢を愛したい。それゆえにこそまた、おのれの不勉強を棚に上げて勝手なことを言わせていただいた。忽々の間、委曲をつくし得なかっただけに申しわけないと思う。著者の第二、第三の泡鳴論を念じ、幸いに非礼を諒恕されるならばと、願うのである。

（昭52・11　双文社出版　六、八〇〇円）

佐藤房儀『詩人萩原朔太郎』

久保田芳太郎

よく知られているように、萩原朔太郎は『月に吠える』について、「処女詩集『月に吠える』は、純粋にイマジスチックのヴィジョンに詩境し、これに或る生理的の恐怖感を本質した詩集であった。」（『定本青猫』序）と述べている。とするなら、そこでとうぜん、「イマジスチックのヴィジョン」と「生理的の恐怖感」とは何かということ、あるいはこの二者の関連性などが問題視されてくる。さらにまた、それらをどう評価し、位置づけるかによって、おのずから朔太郎の位相も決定されてくるというわけなのだ。